

Title	世界最高水準の教育研究拠点の構築と運用 (4月4日、慶應義塾大学三田キャンパス 北館ホール)
Sub Title	Formation and management of world-level centers for education and research
Author	渡辺, 茂(Watanabe, Shigeru)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	Newsletter Vol.8, (2009. 6) ,p.3- 3
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000008-0003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

世界最高水準の教育研究拠点の構築と運用

Formation and management of world-level centers for education and research

(4月4日、慶應義塾大学三田キャンパス 北館ホール)

2009年4月4日に慶應義塾大学の3つのグローバルCOE拠点による拠点の形成や運営に関するシンポジウムが開かれた。これまでに研究内容に関するシンポジウムなどは数多く開催されているが、形成に到る道のりや運営方法に関するシンポジウムはなく、大変ユニークなシンポジウムであった。

開催に先立ち、安西前塾長の挨拶があり、ついで義本博司・文部科学省高等教育局大学振興課長が祝辞を述べられた。その後、生命科学分野の末松誠「in vivo ヒト代謝システム生物学拠点」リーダーが拠点の概要を説明した。最新の実験動物学と代謝システム生物学の融合によるヒト代謝システム生物学拠点には4つの研究クラスタがおかれている。生体防御系代謝解析クラスタ、in vivo モデル開発クラスタ、代謝ネットワーク解析クラスタ、細胞分化・代謝制御解析クラスタの研究クラスタである。学内では、医学研究科、理工学研究科、政策メディア研究科の連携で研究が進展しており、国際連携としてはカロリンスカ研究所、ボストン大学、ジョンス・ホプキンス大学との連携により若手研究者に国際性を持たす試みを行っている。また、教員人事などをふくむ医学部全体の改革により、後期博士課程の競争率がアップし、有能な人材が確保されている。女性研究者の育成も積極的に行っており、世界レベルの女性研究者が誕生していることも特徴である。

次に情報・電気・電子分野の大西公平「アクセス空間支援基盤技術の高度国際連携」リーダーが、アクセス空間という言葉の説明から始め、革新的デバイス創成のための物理基盤工学、環境埋め込みデバイス工学、実世界実時間ネットワーク通信工学、知覚・表現メディア工学の4分野の連携による

教育研究の展開をそれぞれ具体的な例を示して説明した。国際連携についてはハーバード大学、リヨン大学、西安交通大学をコアパートナーとし、国際インターンシップや国際ワークショップなどの取り組みなどを説明した。

最後は本拠点で、渡辺が拠点形成における理科系の拠点と異なる点を、テーマ選定の難しさ、大学院生の数、および研究者のキャリアパスの3点から説明した。その後、人文系の古くからの課題であり、かつ分野融合的なアプローチが可能なグローバルな課題としての「論理と感性」を生物学的基礎から文化的制約まで統合的に研究する5つのプロジェクトチーム（脳と進化、遺伝と発達、言語と認知、哲学・文化人類学、論理・情報）を紹介した。これらの研究チームへの参加が大学院の履修科目となる大学院制度の構築、若手の研究発信のための取り組み、ケンブリッジ大学や嘉泉大学（韓国）との若手セミナーなどを紹介した。国際連携のためにはまず国内連携が必要であるとの観点から5つのグローバルCOE拠点による「心に関するグローバルCOEネットワーク」の構築を行っており、また国際連携は個人レベルでの連携を研究機関間の連携協定に基づく機関連携にしている。そしてこの拠点の大きな特徴はMRIをはじめとする脳科学技術を装備した人文系拠点である点で、今後の人文系拠点形成のモデルとなることが期待できる。その後、若手研究者による具体的研究例として星、伊澤両名による研究紹介があった。

後半は村井前理事の司会による全体討議で、拠点の形成、運営方法、維持について若手の聴衆からの発言もあり、安西前塾長とともに活発な討論がなされた。(渡辺 茂)

Three global COE centers, in vivo Human Metabolomic System Biology, High-level Global Cooperation for Leading-edge Platform on Access Spaces, and Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility, held a joint symposium in 4th April 2009. The purpose of the symposium was not presentation of scientific results but practical discussion on management of the global COE centers. Professor Suematsu who is the leader of the global COE

center in the field of life science, Professor Onishi who is the leader of the center in the field of information sciences, electrical and electronic sciences, and Professor Watanabe, the program leader of CARLS, introduced their centers and pointed out current problems in management and future plan of the centers. After the talks from each global center, we had very active discussion among speakers and audience.

